〔研究ノート〕

我が国におけるケルシェンシュタイナー関係文献目録及び解題（Ⅰ）

山　﨑　高　哉*

本文献目録及び解題は、我が国において、ドイツの教育改革者にして教育学者ゲオルグ・ケルシェンシュタイナー（Georg Kerschensteiner, 1854-1932）の教育思想と実践を紹介した単行本・叢書・講座等並びに雑誌・学会誌・研究紀要等に発表された論文・記事について発表順に列記し、かつ解題を施したものである。ただし、紙幅の関係から、本号においては、雑誌・学会誌・研究紀要等に発表された論文・記事のみを扱っている。

個々の論文・記事に関しては、著・訳者、論文・記事名、誌名、巻・号、発行年月、概要の順で記述した。発行年月が同じものについては発行日順、発行日が同じ場合には五十音順に並べた。また、同一誌に数編の論文・記事が掲載されている場合にはその掲載順に記した。

論文・記事の概要は、著者の言葉をできるだけ原典通りに引用することを旨とした。なぜならば、ケルシェンシュタイナーに対する著者の評価・見解を忠実に伝えるためと、例えば、Arbeitsschule の訳語一つを取ってみても、著者により「勤労学校」、「作業学校」、「労作学校」、「労働学校」等様々に訳され、しかも訳語自体既にその思想に対する著者の基本的立場を表明している場合が少なくないからである。翻訳・紹介については、その原書・出典を明記した。

本文献目録は、大阪府立図書館、京都大学附属図書館、京都府立資料館、国立国会図書館、天理大学附属天理図書館、東京教育大学附属図書館、富山大学附属図書館、奈良女子大学附属図書館、広島大学附属図書館、龍谷大学大宮図書館所蔵の図書・雑誌類を中心に作成したものである。できるだけ詳細に調べたつもりであるが、まだ多くの遺漏があることと思う。また、文献の存在は分かっていながら、筆者未見のため本目録に収録できなかったものも少なくない。お気づきの点をご教示いただき、今後完璧を期したい。

本文献目録の作成に当たって、梅根悟「日本に於けるケルシェンシュタイナー関係文献」（「教育学研究」第１巻第３号、昭和７年６月）及び東岸克好「わが国におけるケルシェンシュタイナーに関する主な文献」（ケルシェンシュタイナー　東岸克好訳『労作学校の概念』、玉川大学出版部、昭和 40 年７月）を参照した。また、恩師篠原陽二先生を初め、石附実（天理大学･大阪市立大学）、稲葉宏雄（京都大学）、高野兼吉（富山大学･創価大学）の、今は故人になられた諸先生方には文献の所在をお教えいただいたり、貴重な文献を拝借させていただいたりした。記して厚く謝意を表するとともに、ご冥福をお祈り申し上げる。

*大阪総合保育大学　児童保育学科

本文献目録は、かつて昭和46・49年度文部省科学研究助成費による「大正期教育の総合研究」（代表者、池田進京都大学教授）における個人分担テーマとの関連で作成したものである。ここに収録された文献を基に、筆者は拙稿「わが国におけるケルシェンシュタイナー紹介と受容―大正期を中心として―」（池田進　本山幸彦編『大正の教育』、第一法規、昭和53年9月）をまとめた。ご参照いただければ幸甚に存ずる次第である。

なお、本文献目録及び解題（Ⅰ）は、富山大学教育学部紀要第27号（昭和54年3月刊）と第28号（昭和55年3月刊）に掲載されたものに、その後所在が明らかになったり、新たに発表されたりした論文等を増補して作成したものである。

Ⅰ. 雑誌・学会誌・研究紀要等に発表されたもの

1　森岡　常藏　　教科案論の一研究　　教育　247　明、37、8

「今の教育の學を講ずる者教案論を説くに當りて、多くはチルレルラインの舊套を脱する能はざるの觀あるを憾み」、ケルシェンシュタイナー（以下、G. K. と略記）の処女作 Betrachtungen zur Theorie des Lehrplanes（1899）の大要を紹介。

2　乙竹　岩造　　社會的教育學説を論ず　　教育學術界　18、4　明、42、1

G. K. を「社會下層人民の教育方法」を説く「社會的教育學者」として紹介。

3　槇山　榮次　　實用主義の教授と發表教授　　教育界　8、7　明、42、6

G. K. の論文 Berufs-oder Allgemeinbildung?（1904）に拠り、ミュンヘン市の小学校における「實際的陶冶（Praktische Bildung）」の「主義」と「方法」について紹介。

4　深川　巖石　　學校衞生に關する外報　　教育學術界　19、4　明、42、7

ミュンヘン市がG. K. による補習学校（Fortbildungsschule）の改正組織を国民学校（Volksschule）卒業後の生徒の体育奨励の「好例」としたことを紹介。

5　吉田　熊次　　國民生活本位の教育主義　　小學校　9、7　明、43、7

G. K. の「一種の新教育」、とりわけ補習教育の改革を「我國の教育にも採用し得る余地」ありとして、詳しく紹介。

6　（一 記 者）　　ミュンヘンの強制補習學校　内外教育評論　5、8　明、44、8

G. K. の著 Organisation und Lehrpläne der obligaten Fach-und Fortbildungsschulen für Knaben in München（1910）の序論の要約紹介。

7　稲垣　末松　　學習學校と勞作學校との主張並にその評論（上）

教育實驗界　28、9　明、44、10

G. K. を「勞作學校（Arbeitsschule）」の主張の「代表者」の一人、しかも「急激派とも稱すべきもの」とし、彼の「勞作學校の趣旨を實行する」施設法に簡単に論及、批判。

8　佐々木　吉三郎　　外國に於ける最近の教育實際上の諸問題

教育學術界臨時増刊『最近學藝大觀』　24、2　明、44、10

G. K. の「國民的教育（Staatsbürgerliche Erziehung）」説、「勞働學校（Arbeitsschule）」論及びミュンヘンの補習学校について簡単に紹介。

9　佐々木　吉三郎　　現代精神界の根本思潮と教育（下）（合同主義と教育、主觀主義と教育、新理想主義と教育）　教育研究　92　明、44、11

学校に「公民科（Staatsbürgerkunde）」ないし「國民教育科」を置いて「共同團體に對する愛、社

会の爲め義務を盡す習慣、公民心等を養成」しようとする G. K. の考えを「合同主義の一現象」として簡単に紹介。

10　大瀬　甚太郎　　智識と技能　　教育學術界　22、4　明、45、1

「近頃ケルシエンスタイネルと云う人は作業上の共同と云うことを公民教育の基礎としなければならぬと主張して居」り、「其の精神は至極賛成すべきこと」であるとして、簡単に彼の所説に言及。

11　篠原　助市　　勤労學校の主張　　教育界　11、5　明、45、2

G. K. を「勤労學校（Arbeitsschule）の主張を最も明確に表明せるもの」として紹介、批判。

12　竹 條 生（篠原　助市）　　第一回獨逸少年教育及び少年研究會議

教育之實際　6、5　明、45、2

1911 年 10 月ドレスデンで開かれた Erster Deutscher Kongreß für Jugendbildung und Jugendkunde における G. K. の講演 Der Begriff der Arbeitsschule の大要を紹介。

13　槇山　榮次　　余が信ずる有効なる教授法　　教育實験界　29、3　明、45、3

G. K. の「活動學校（Arbeitsschule）」の主張を「實用的活動主義」として紹介。

14　藤原　喜代藏　　獨逸の強制補習教育（一）、（三）、（四）

教育學術界　24、7 & 25、2～3　明、45、3・6～7

ミュンヘン市の補習学校制度・組織について「最も完全なる点に於て誇るに足るべきもの」として詳述。

15　吉田　熊次　　アルバイツシウレ問題　　小學校　13、2～3　明、45、4～5

前述（12）の会議における G. K. とガウディヒ（Hugo Gaudig, 1860-1923）との論争の報告。両者の主張を比較して前者を「現實派」、後者を「理想派」とし、前者に左袒。

16　竹 條 生（篠原　助市）　　ケルシエンシタイナーの品性陶冶論

教育之實際　6、9　明、45、6

「近時現れた二三の意志教育論の中、……最も吾人の傾聴に値するもの」として、G. K. の著 Charakterbegriff und Chraktererziehung（1912）の大要を紹介。

17　森岡　常藏　　教育上に於ける余の信條

日本之小學教師　14、162　明、45、6

G. K. の「勤労學校（Arbeitsschule）」論を「手工中心主義」として簡単に紹介。

18　竹條生（篠原　助市）　　海外思潮　雜報　　教育之實際　6、10　明、45、7

ミュンヘンにおいて G. K. の提案により、国民学校の女児第８学年を義務化し、また女子日曜学校（Sonntagsschule）を義務制の補習学校に変更する決定がなされたことを報告。

19　湯原　元一　　獨逸の初等教育界の於ける新運動

帝國教育　361　大、元、8

G. K. を「作業教授の思想……を今日の形に於て大袈裟に實現しやうと試みて居る」一人とし、彼の補習学校改革の特色について紹介。

20　手島　精一　　實業補習教育に就いて　　帝國教育　361　大、元、8

ミュンヘンにおける徒弟の工業教育を世界中で「最も熱心」かつ「一番成績のよい」ものとして紹介。

21　湯原　元一　　現時歐州に於ける小學校改革運動の大要（就中實行主義に就て）

日本之小學教師　14、165　大、元、9

G. K. の「仕事學校（Arbeitsschule）」の根本思想とその組織の実際について詳述、そして「今日ではこの種の學校としては最も完備したもの」と評価。

22　福島　政雄　　獨逸労働學校（Arbeitsschule）に關する研究討議
帝國教育　365　大、元、12
前掲（12）の会議におけるG. K. とガウディヒとの討論について紹介。

23　乙竹　岩造　　ケルシェンシュタイナー氏の教育説を評論す（一）～（八）
教育學術界　26、6～7＆27、2～7＆28、2　大、2、1以降
「近頃獨逸に於て現はれた教育意見の中で頗る傾聴に値するもの、一つ」として、G. K. の著Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend（1901）とGrundfragen der Schulorganisation（1907）の概要を系統的に論述。

24　竹 條 生（篠原　助市）　　混沌たる第二回獨逸少年教育會議
教育之實際　7、4　大、2、2
1912年12月ミュンヘンで開かれたZweiter Deutscher Kongreß für Jugendbildung und Jugendkundeにおけるの講演Die aus dem Wesen der Bildung sich ergebenden Forderungen für die Gestaltung der Schultypen und ihrer Lehrpläneの概要を紹介。

25　湯原　元一　　實際を忘れざる政治的教育
内外教育評論　7、3　大、2、3
政治教育について「最もよく研究して」いるとしてミュンヘンの補習学校に言及。

26　中島　半次郎　　獨逸に於ける教育研究の現状（其五）
教育學術界　27、2　大、2、5
G. K. を「國民教育（Staatsbürgerliche Erziehung）」論の代表者とし、彼の著作及びミュンヘンにおける事業に論及。

27　上石　保教　　公民教育　内外教育評論　7、5　大、2、5
G. K. を「公民教育論者の中でも最も其所論の堂々として、且他の教育主義に比して慥に一特色のある教育を主張」しているとし、彼の「公民教育（Staatsbürgerliche Erziehung）」説と補習学校改革について詳論。

28　入澤　宗壽　　立憲的教育と「公民的教育」
教育實験界　30、5　大、2、6
G. K. の「公民的教育（Staatsbürgerliche Erziehung）」論を簡単に紹介。

29　Ｙ Ｋ 生（上石　保教）　公民教育問題　教育研究　116　大、2、11
G. K. の「公民教育」論及びその立場からの学校改革案について簡単に紹介。

30　乙竹　岩造　　國家的公民教育問題　現代教育　2　大、2、11
G. K. の「國家的公民的教育（Staatsbürgerliche Erziehung）」論に言及。

31　上石　保教　　現今の教育問題と活動主義教育
教育學術界　28、3　大、2、12
G. K. を「補習教育（殊に實業補習教育）の理論及實際家として世界第一」とするとともに、彼の説く「公民教育が活動主義教育其物である」とし、西半球におけるデューイ（John Dewey, 1859-1952）に対し、東半球における「活動主義教育者の代表者」と評価。

32　佐々木　吉三郎　　勤勞と教育　小學校　14、7　大、2、12
G. K. を「勞働學校（Arbeitsschule）と云ふことに就いて、特に熱心に鼓吹して居る人」とし、その「勞働學校」論を紹介、批評。

33　岡山　秀吉　　獨佛に於ける手工教育　教育時論　1033　大、2、12

G. K. を「實用主義、勤勞主義教育の主張者」と簡単に紹介。

34　上石　保教　　所謂『公民教育』問題　　教育界　　13、3　　大、3、1

G. K. を「公民教育と公民教授を峻別し、両者の混同を攻撃する論者の内で最も有名なる人」として紹介。

35　手島　精一　　補習教育に就て　　教育時論　　1035　　大、3、1

G. K. の補習教育論を「大に傾聴し宜しく實行すべき價値がある」ものとして紹介。

36　白土　千秋　　小學教育の革新（(ケルシエンシユタイナー氏「勤勞學校」アルバイト、シューレーを讀みて我邦小學校教育の革新的實行に及ぶ。)）（一）～（四）

教育時論　　1035～36・39・41　　大、3、1以降

G. K. を「勤勞學校（Arbeitsschule）問題……の顕著なる代表者」とし、彼の著 Begriff der Arbeitsschule（1912）における所論を詳細に紹介。

37　岡部　爲吉　　公民教育　　學校教育　　3　　大、3、3

G. K. の「公民教育」説を他の論者との比較対照において紹介、論評。

38　富田　義介　　歐米に於ける職業教育の現勢

教育之實際　　8、7　　大、3、5

ミュンヘンの実業補習学校の組織と G. K. の「勤勞主義」について紹介。

39　若槻　道隆　　補習學校に關する諸問題（上）

教育學術界　　29、3　　大、3、6

G. K. がアメリカの実業教育委員会長クロイツポインター（Paul Kreuzpointer）に送った「獨逸に於ける實業教師採用に關する報告」を引用紹介。

40　竹 條 生（篠原　助市）　　公民教育の要義　　教育之實際　　8、10　　大、3、8

G. K. の著 Der Begriff der staatsbürgerlichen Erziehung の第３版（1914）に付け加えられた一章 Über einige wesentliche Merkmale des staatsbürgerlichen Chrakters に対するブッデ（Gerhard Budde, 1865-1944）の評論を紹介。

41　湯原　元一　　勤勞教育論（一）、（四）、（九）

小學校　　17、10 & 18、1・7　　大、3、8以降

G. K. を「勤勞教育の代表的主張者」とし、彼の「勤勞に關する意見」及び「勤勞教育の根本思想」について詳論。

42　手島　精一　　工業補習教育に就て　　教育實驗界　　34、4　　大、3、8

「ミュンヘン市の補習教育が……盛になったのは、スタイネル（ママ）氏の主唱による事多大」であるとし、その組織について簡単に紹介。

43　川本　宇之介　　公民教育の教育學上の位置及び其の概念―公民教育研究其の一―

内外教育評論　　8、9　　大、3、9

G. K. の「公民教育の概念」について紹介。

44　竹 條 生（篠原　助市）　　職業主義―米國教育の一面

教育之實際　　8、12　　大、3、10

アメリカにおける「ケルシエンシ（ママ）タイナーの職業的教育に學ばんとの熱心の迸しり」に言及。

45　川本　宇之介　　四種類の教師　　教育界　　14、1　　大、3、11

G. K. の著 Charakterbegriff und Charaktererziehung の第10章を要約紹介。

46　松浦　鎮次郎　　實業の発達と教育　　教育之實際　　9、4　　大、4、2

ミュンヘンの実業補習教育を「餘程面白い」として紹介。

47　入澤　宗壽　　教育上の現實主義と理想主義　　教育界　　14、5　　大、4、3

G. K. の「作業學校（Arbeitsschule）」論や「公民教育」論を「教育上の現實主義」と規定し、簡単にその根拠に論及。

48　湯原　元一　　大伯林の基礎教案に就て（國民教育の将来を卜す）

内外教育評論　　9、4　　大、4、4

1914 年に出された Grundlehrplan für die Volksschulen Groß-Berlins が G. K. 等の「勤勞學校」の思想の影響を受けていることを指摘、彼の主張にも簡単に言及。

49　上石　保教　　政治教育公民教育國民教育の異同

教育之實際　　9、7　　大、4、5

G. K. の「公民教育」の定義について簡単に紹介。

50　上石　保教　　公民教育思潮　『國民教育の十字軍』　帝國教育　　394　　大、4、5

G. K. の「公民教育」論に関するメッサー（August Messer, 1867−1937）の見解を紹介。

51　川本　宇之介　　吾人の主張する公民教育（一）～（三）

教育界　　14、8～9・11　　大、4、6以降

G. K. の「公民教育」説を「略吾人の説と一致する」とし、彼の所説を随所で引用。

52　白土　千秋　　勤勞學校の建設と其の實際的施設

教育學術界　　31、5～6　　大、4、8～9

G. K. の著 Grundfragen der Schulorganisation（2.Aufl., 1910）所収の、チューリッヒで 1908 年 1 月 12 日に開かれたペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi, 1746−1827）第 162 回生誕記念祭講演 Die Schule der Zukunft eine Arbeitsschule（1908）を翻訳、紹介。

53　島村　嘉一　　ケルシェンシュタイナー氏の勤勞學校論

小學校　　19、10　　大、4、8

前記 52 の講演をオグデン（C.K.Ogden）による英訳 School and Nation（1914）から翻訳。

54　蒼　髯　　學校教育と社會の結合　　教育研究　　141　　大、4、9

G. K. を、学校教育を社会の実際に結合しようとする「社會的教育學者」の一人として紹介。

55　島村　嘉一　　ケルシェンシュタイナー氏の生産的勤勞と其教育的価値―（オグデン氏著『學校と國民』より）―　　小學校　　20、2・5　　大、4、10・12

前掲オグデンの英訳より、G. K. のミュンヘン大学での講演 Produktive Arbeit und ihr Erziehungswert（1906）を翻訳。

56　川本　宇之介　　最近教育思潮（ケルシェンシュタイナーを中心としたる）

帝國教育　　400　　大、4、11

G. K. の教育思想を「公民教育」、「反主知主義」、「勤勞學校」及び「品性教育」に分類、紹介。また、彼の図画教授論にも簡単に言及。

57　　「國民的統一學校ナチオナールアインハイツシューレ」に關する意見

ケルシエンスタイネル　　教育研究　　145　　大、4、12

1914 年キール市で開かれた Deutsche Lehrerversammlung における G. K. の講演 Die nationale Einheitsschule の要旨の紹介。

58　川本　宇之介　　補習教育と公民教育

小學校増刊『最近思潮教育冬季講習録』　　大、4、12

G. K. の主張とミュンヘンの補習学校組織に随所で言及。

59　金生　喜造　　公民教育の目的（上）（下）
教育時論　　1114～5　　大、5、3～4

G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend の第２章の翻訳。

60　川本　宇之介　　職業教育の意義　　内外教育評論　　10、4　　大、5、4

職業教育の意義を明らかにするため、G. K. の所説に随所で論及。

61　川本　宇之介　　普通教育に於ける實業科―ダウィッド・スネッデン博士の説を主として―　　教育界　　15、6　　大、5、4

G. K. の「實業科（Gewerbekunde）」に関する見解にも言及。

62　文部省普通學務局　　戰争と教育（ケルシェンシュタイネル）
時局に關する教育資料　　7　　大、5、5

雑誌 Internationale Monatsschrift für Wissenschaft, Kunst und Technik（1915）所収の G. K. の論文 Krieg und Erziehung を要約、紹介したキール新聞 1915 年 6 月 9 日付記事の翻訳。

63　乙竹　岩造　　教育實際家の研究　　教育之實際　　10、8　　大、5、6

G. K. の著 Grundfragen der Schulorganisation（2.Aufl., 1910）所収の論文 Lehrerbildung（1907）における所説を簡単に紹介。

64　柳川　石次郎　　實業補習教育に對する偏見
教育之實際　　10、8　　大、5、6

補習教育に「公民教育の必要なる所以」として、G. K. の実践を挙げ、簡単に紹介。

65　棚橋　源太郎　　高等小學校に於ける手工科　　教育界　　15、9　　大、5、7

G. K. が 1900 年以来実施した「ミユンヘン市小學校に於ける男子の手工科」について簡単に紹介。

66　長　壽吉　　國家公民としての知識　　教育界　　15、10　　大、5、8

G. K. の「國家公民教育（Staatsbürgerliche Erziehung）」論及びミュンヘンの実業補習学校における「公民訓（Staatsbürgerkunde）」の教授を批判。

67　川本　宇之介　　職業陶冶か一般陶冶か　　教育之實際　　10、12　　大、5、10

G. K. の「職業陶冶（Berufsbildung）は人間陶冶（Menschenbildung）のための門である」という言葉は「どこまでも真理である」として、結論部において彼の所説に論及。

68　小西　重直　　戰後に於ける教育學の研究法に就て　　學校教育　　36　大、5、11

戦後においては G. K. の如く「道徳は最後の目的なれども先づ經濟的に獨立し得る人間を作ることが必要」とする思想が盛んになるとして、彼の説に簡単に言及。

69　稲村　純一　　公民教育の思潮に對する吾人の態度を論じ法制及經濟科の教育に及ぶ
學校教育　　36　大、5、11

G. K. の「公民教育論」及び補習学校組織について簡単に紹介。

70　大 島 生　　ドクトル、ケルシェンシュタイナーの米國の友に送りし公開状
學校教育　　36　大、5、11

雑誌 Der Säemann（5.Jg., 1914）に掲載された G. K. の 0ffene Briefen an amerikanischen Freunde の抄訳。

71　千葉　命吉　　ケルシエンスタイナー氏公民教育の目的其一、其二
小學校　　22、3・6　　大、5、11・12

G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend（4.Aufl., 1909）のプレスランド（A.J.Pressland）による英訳 Education for Citzenship（1915）の第２章の抄訳的紹介。

72　手嶋　精一　　補習教育に對する二三の希望　　小學校　22、4　大、5、11
ミュンヘンの補習学校を「一番金を使ふ學校」とし、簡単にその組織に言及。

73　川本　宇之介　　獨英二國の補習教育　　小學校　22、4　大、5、11
ミュンヘンの補習学校の「目的」「教科課程」「教授時間、入學規定、生徒數」について詳しく紹介。

74　關屋　龍吉　　補習學校に於ける公民教育の内容
小學校　22、4　大、5、11
ミュンヘンの補習学校を「補習教育の模範」とし、その「公民科」の教科内容を紹介。

75　松浦　鎭次郎　　我國の補習教育　　小學校　22、4　大、5、11
ミュンヘンの補習学校を「世界補習教育の模範」とし、G. K. の補習教育の理想と「殆んど經濟職業のあらゆる方面に渉つて居る」組織に論及。

76　山口　正　　現代の要求する補習教育　　小學校　22、4　大、5、11
「補習教育を論ずる者が斯界のビスマークたるケルシエンシユタイナーに言及しないでは相濟まぬ気がする」として、彼の補習学校の目的に簡単に言及。

77　岡部　爲吉　　創作と實知（一）（二）
學校教育　37～38　大、5、12＆大、6、1
G. K. を「其論説に於て創作喜悦の教育上の價値を重視して居る」とし、彼の「勤勞學校」説を論評。

78　金生　喜造　　公民教育の外部的條件　　帝國教育　415　大、6、2
G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend（1910）の第３章の翻訳。

79　佐藤　熊治郎　　児童の自己活動を中心問題とせる教育思潮
學校教育　40　大、6、2
G. K. の「勤勞學校」説を「考えると共に働き得る人間」を目指す思潮の一つとして簡単に紹介。

80　金生　喜造　　公民教育評論（ケ［ママ］ルハルト･ブッデ『の［ママ］近世教育問題』による）
小學校　23、4　大、6、5
ブッデの著 Moderne Bildungsprobleme（1912）により、G. K. の著 Begriff der staatsbürgerlichen Erziehung（1910）の内容を紹介。

81　川本　宇之介　　國民教育か公民教育か―森岡圖書官の所論を讀む―
小學校　24、1　大、6、10
森岡常蔵の主張する「國民教育」と G. K. の唱える「公民教育」とが「其の思想相一致すること」を論証。

82　金生　喜造　　學校以外の教育力　　小學校　24、1　大、6、10
G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend（1910）の第６章の翻訳。

83　岡部　爲吉　　創作能の性質と養成法　　學校教育　49　大、6、11
創作能力の養成に関し、G. K. の「實行と知見」、「経驗的知識に対する書籍的知識」についての見解を批判。

84　　大阪實業補習學校　　教育時論　1181　大、7、2
大阪市が「ケルシエンスタイナーの名を以て有名なるミユンヘン實業補習學校に準據せる」補習学校を創設しようと予算を計上したことを報告。

85　堀　孝雄　　圖畫教授近時の傾向　　學校教育　54　大、7、2
日本の図画教授の進歩に与って力のあった教育思潮の一つとして、G. K. の「實用陶冶説（生活本位主義）」と「個性の発表尊重説（創作作業中心主義）」を挙げ、簡単に紹介。

86　佐々木　吉三郎　　職業教育の改革と新文相　　教育時論　　1207　　大、７、10
ミュンヘンの補習学校の例を挙げて、「中等階級の職業教育」の改革を提言。

87　　獨逸の職業教育熱　　教育時論　　1207　　大、７、10
第一次世界大戦中もドイツにおいてG. K. の書物は「如何なる所にも愛讀せられざるなし」と紹介。

88　大智　剛一郎　　品性教育論（一）～（三）
教育學術界　　40、１・３・５　　大、８、10・12＆大、９、２
G. K. の著 Charakterbegriff und Charaktererziehung（1912）の第９～11章の翻訳。

89　山原　三郎　　勞働的教養の基礎としての公民教育
小學校増刊『最近思潮教育冬季講習録』　　大、８、12
G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend（4.Aufl., 1909）の全訳。

90　日向　保　　補習學校に於ける公民教育　　教育時論　　1279　　大、９、10
G. K. の「公民教育」論に簡単に言及。

91　遠藤　順一　　戰後に於ける獨逸の實業補習教育
小學校　　31、１～２　　大、10、１～２
G. K. を「ミュンヘン市の實業補習教育をして天下の模範たらしめた」とし、彼の補習学校改革の原則とミュンヘン市の補習学校制度の実際について詳述。

92　龍山　義亮　　職業教育の新意義　　教育學術界　　43、６　　大、10、９
G. K. の「公民教育論」及び「勤勞學校論」を「総て職業の意義を広く解し生活と職業とを離すべからざるものとする思想」として紹介、評論。

93　田制　左重　　現代勤勞主義教育概觀（一）　　教育論叢　　７、５　　大、11、５
G. K. の「勤勞學校」論を「現今勤勞主義の典型」の「第一」として紹介。

94　遠藤　順一　　公民教育論　　教育學術界　　46、４　　大、12、１
G. K. の論文 Staatsbürgerliche Erziehung（In:Die deutsche Schulreform.Ein Handbuch für die Reichsschulkonferenz, 1920）の抄訳。

95　千葉　敬止　　公民教育の由来と意義　　教育時論　　1359　　大、12、１
G. K. の「公民教育」論に言及。

96　木村　正義　　公民教育［一］［二］
公民教育職業教育補習教育　　１～２　　大、12、１～２
G. K. を「公民教育の権威」とし、彼の「公民教育」説の大要を紹介。

97　遠藤　順一　　1920年獨逸教育會議に於ける統一學校論
公民教育職業教育補習教育　　１・３　　大、12、１・３
「獨逸教育會議（Reichsschulkonferenz, 1920）」におけるG. K. の「統一學校論」とそれに基づく学校制度案を紹介。

98　松本　喜一　　商業補習學校の學科目と其の教材［二］
公民教育職業教育補習教育　　４　　大、12、４
ミュンヘン市の商業補習学校における「職業科」を「大に參考するに値する事柄」として、その「學科目」等について簡単に紹介。

99　美野　光太郎　　補習學校と公民教育　　學習研究　　２、11　　大、12、11
「補習教育は結局公民教育」であることを明らかにするために、G. K. の所説に言及。

100　木村　正義　　公民教育　　公民教育職業教育補習教育　　11　　大、13、１

G. K. の「公民教育」の目的と方法について簡単に紹介。

101 原　房孝　　公民科教授法（三）

公民教育職業教育補習教育　　11　　大、13、1

G. K. を「公民教育即國民教育」論の代表者として、彼の主張の大要を紹介。

102 遠藤　順一　　獨逸の公民教育　　公民教育職業教育補習教育　　12　　大、13、2

G. K. の「公民教育」説に簡単に論及。

103 長田　新　　ケルシェンシュタイナー教育者本質論に就て

帝國教育　　500　　大、13、4

G. K. の著 Die Seele des Erziehers und das Problem der Lehrerbildung（1921. 以下 Die Seele des Erziehers と略記）をシュプランガー（Eduard Spranger, 1882−1963）の著 Gedanken über Lehrerbildung（1920）とともに「現代に於ける教師論の双璧」と評価。

104 大槻　正一　　ケルシエンシユタイナー教育者本質論

帝國教育　　500　　大、13、4

G. K. の著 Die Seele des Erziehers（1921）の第 1 章を翻訳。

105 木村　正義　　公民教育　　公民教育職業教育補習教育　　15　　大、13、5

「ミユンヘンの實業補習學校は、獨逸公民教育の大家、ゲオルグ、ケルシエンシユタイナー氏の指導に依って組織せられ、以て今日の隆盛を致したものである」として、そこにおける「公民教育」の目的、内容について紹介。

106 木村　正義　　公民教育と諸教科目との関係

公民教育職業教育補習教育　　18　　大、13、8

G. K. の「公民教育」と「實業科目」との関係についての見解を紹介。

107 川本　宇之介　　英獨米に於ける公民教育の現状

公民教育職業教育補習教育　　19　　大、13、9

第一次世界大戦後のドイツ教育界において、G. K. の「主張理想が可なり弘まり、プロイセンにまでも行はれて居る」ことを紹介。

108 木村　正義　　公民教育方法論

公民教育職業教育補習教育　　19・21 ～ 22　　大、13、9 以降

G. K. の「作業教育論」を学校における「公民訓練の最も有力な手段」の一つとして簡単に紹介。

109 大槻　正一　　ケルシエンスタイー（ママ）氏國民教育の根本問題

教育學術界　　50、2　　大、13、11

G. K. の著 Grundfragen der Schulorganisation（2.Aufl., 1910 以降）所収の論文 Das Problem der Volkserziehung（1908）の訳述。

110 大槻　正一　　ケルシェンスタイナー著教師養成論の根本的要求

帝國教育　　507　　大、13、11

G. K. の著 Die Seele des Erziehers の第 4 章の最初の 4 節を抄訳。

111　　公民教育の権威者　　公民教育職業教育補習教育　　23　　大、14、1

巻頭に G. K. の 70 歳時の写真と筆跡の口絵を掲げ、彼の近況を紹介。

112 小西　重直　　勞作教育の問題　　哲學研究　　106　　大、14、1

「勞作教育」思潮を「理想主義」と「物質主義」の二つの相反する流れに分け、G. K. をその「中間」に位置づけ、簡単に彼の見解にも論及。

113 入澤　宗壽　　文化教育學者としてのケルシエンシユタイナー
教育論叢　14、4　大、14、4

G. K. の著 Das Grundaxiom des Bildungprozesses und seine Folgerungen für die Schulorganisation（1917.2 Aufl.，1924. 以下 Das Grundaxiom des Bildungprozesses と略記）を中心に、彼の「文化教育學者」としての立場について論述。

114 岡　篤郎　　公民教育と政治教育［一］［二］
公民教育職業教育補習教育　26・28　大、14、4・6

「公民教育」に関する諸家の学説を紹介し、G. K. のそれを「國民の公共生活に対する實生活上の活きた訓練を与へる教育として……吾人の尤も有力なる參考となるもの」と評価。

115 日田　權一　　陶冶作用の根本公理　明日の教育　5、10　大、14、10

G. K. の「新學説」として前掲 Das Grundaxiom des Bildungprozesses を要約紹介。

116 上島　直之　　歐米に於ける實業補習教育
公民教育職業教育補習教育　32　大、14、10

ミュンヘン市の補習学校が「獨逸各地方の補習學校の模範」であり、それは G. K. の「努力貢獻」によるものとして、その現状を詳しく紹介。

117 北澤　種一　　公民教育に就て　教育時論　1452　大、14、10

G. K. の主張する「公民教育」を「知育でなく體驗の教育」と規定し、日本の公民教育における「體驗の教育」の必要性を強調。

118 大槻　正一　　ケルシエンスタイナー氏國民學校改造論
學校教育　149　大、14、11

G. K. の著 Grundfragen der Schulorganisation（1906）所収の講演 Der Ausbau der Volksschule（1905）の翻訳。

119 笠原　謙蔵　　公民教育に於ける職業の意義　帝國教育　519　大、14、11

「公民教育」の「必須的重大内容として職業尊重を力説」したことを G. K. の説の「特に着目すべき特色」と評価。

120 乙竹　岩造　　陶冶的關聯の本質　教育論叢　15、6　大、15、6

G. K. は「陶冶的關聯の本質」を個性の態度と文化財の構造との関連において捉えているとして、彼の所論を約説。

121 遠藤　順一　　ケルシェンシュタイネル氏の公民教育説
公民教育職業教育補習教育　41　大、15、7

G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend の第１章の抄訳。

122 山本　猛　　個性教育の基本問題　倫理教育研究　15～16　大、15、7・10

随所に G. K. を引き合いに出しているが、特に８「個性教育と教材」において、彼の「陶冶過程の根本公理」としての「適合の公理（Axiom der Kongruenz）」を紹介、批評。

123 武部　欽一　　實業補習教育の方法
公民教育職業教育補習教育　43　大、15、9

G. K. の教育説の大要を紹介し、「我が實業補習教育の将来歩むべき道も、正にケルシエンスタイナーの勤勞學校の組織にあらねばならぬと思ふ」と結論。

124 山田　榮　　陶冶に於ける價値支持者としての慣習・慣例・禮式
教育研究　307　大、15、10

雑誌 Die Erziehung（1.Jg., 1925/26）に発表されたG. K. の論文 Sitten, Gebräuche, Kulte als Wertträger im Bildungsverfahren の翻訳。

125 乙竹　岩造　　文化財と陶冶價値　　倫理教育研究　17　昭、2、5

G. K. の「陶冶」の定義と文化財の「陶冶價値」に関する説に簡単に論及。

126 小川生（小川正行）　ケルシエンシユタイナー教授の名誉

學習研究　6、5　昭、2、5

1925年12月22日、G. K. のドイツ教育界に対する多年の功績を表彰するため、彼の「肖像を刻した記念の大銀牌」がプロイセンの文相ベッカー（Carl Heinrich Becker, 1876−1933）によって贈られたことを簡単に報告。

127 木村　正義　　現代教育思潮と公民教育［二］

公民教育職業教育補習教育　51　昭、2、5

G. K. は「公民教育の立場より作業教育、勤勞學校を主張する」とし、彼の所説における両者の「密接不離の關係」について論述。

128 槇山　榮次　　生産主義の教授（其三）　學習研究　6、6　昭、2、6

G. K. の「作業主義」を、フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782−1852）のそれより「遙に經濟的であり、生産的である」が、「生産學校説」のそれより「經濟と教育」ないし「生活と學校」との連結度が弱いと規定。

129 山本　猛　　適合の公理の研究　教育研究　317　昭、2、8

G. K. の「適合の公理」説を要約紹介し、併せてこの公理が教育の実際に対して有する価値と限界に論及。

130 大槻　正一　　ケルシエン・(ママ) スタイナーの公民教育論

學校教育　172　昭、2、10

G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend（4.Aufl., 1909）の第2章の抄訳。

131 入澤　宗壽　　ケルシエンシユタイナーと文化教育學

教育思潮研究　1、1　昭、2、10

G. K. の著 Deutsche Schulerziehung in Krieg und Frieden（1916）から Theorie der Bildung（1926）に至る数著によりながら、彼の「文化教育學者」としての特色を叙述。

132 眞田　幸憲　　アルバイトシユーレの發達變遷（一）

學習研究　7、1　昭、3、1

G. K. を「手業的作業に重きを置ける活動的、技術的又實際的勞作學校」の代表者とし、彼の「勞作學校」論を紹介。

133 大野　齪毅　　アルバイトシューレの概念

倫理教育研究　21　昭、3、1

G. K. を「アルバイトシューレ」の基礎づけにおける「社會的文化的方面の高潮（ママ）者」とし、彼の主張を簡単に紹介。

134 畑中　幸之輔　　ケルシエンスタイナーの教育説（新著「陶冶の原理」の解説及批評）

世界之教育　2、3　昭、3、2

ドレスデン市視学官シュトゥルム（K.F.Sturm）が雑誌 Erziehung und Bildung（Nr.28 1928）に掲載した論文 Kerschensteiners Bildungsbegriff の翻訳。

135 武田　勘治　　古今東西五十大家教育説要論

教育學術界春季特別臨時増刊　　昭、３、４

前篇西洋の部、その四　現代の部４「ケルシエンシユタイナーの教育説」において、G. K. を「獨逸ミユンヘン市の現視学官で、夙に國家公民的教育乃至作爲主義の教育を主張し且つ實施して居る點で其の名著明である」とし、彼の小伝及び教育説の概略を紹介。

136 松月　秀雄　　勤労の教育學的概念　　文教の朝鮮　　34　昭、３、６

G. K. の近況、経歴、性格、「教育學者としての系統」について述べた後、彼が 1926 年 2 月ハンブルク大学で行った講演 Der pädagogische Begriff der Arbeit の大要を紹介。

137 竹井　彌七郎　　勞作學校思想の發達　　教育思潮研究　　２、１　　昭、３、10

G. K. を「勞作學校論の最大の代表者」とし、彼の「勞作學校論」の生成と展開について詳論。

138 入澤　宗壽　　ケルシエンシユタイナー「一般義務教育延長の問題」

教育思潮研究　　２、１　　昭、３、10

雑誌 Die Erziehung（3.Jg., 1928）に掲載された G. K. の講演 Das Problem der Erweiterung der allgemeinen Schulpflicht の要約紹介。

139 吉田　熊次　　新ペスタロツチ主義者ケルシエンシユタイネル

教育思潮研究　　２、１　　昭、３、10

G. K. の生涯と業績について簡単に紹介した「帝國大學新聞」（第 253 号）への寄稿の再録。

140 林　博太郎　　公民教育と勤労主義　　帝國教育　　554　　昭、３、10

「勤労主義と公民教育との間の連絡を健全に打建た」ことを G. K. の「功績」として、彼の所論に簡単に言及。

141 小川　正行　　普通教育と職業　　教育研究　　７、11　　昭、３、11

G. K. の「作業教育論と職業陶冶觀」について紹介。

142 織田　百郎　　小學校に於ける職業陶冶と職業指導の問題に就て

學習研究　　７、11　　昭、３、11

G. K. は「教育の道は職業的の陶冶によつて國民作爲を認識體得させるにありて職業的陶冶を離れては陶冶の意義を失ふもの」と主張しているとし、彼の主張を「正當なるもの」と評価。

143 吉田　熊次　　時勢と國民教育　　児童教育　　23、２　　昭、４、２

初期の G. K. を「國民教育と時勢との連絡を意識的に企圖した者」の「第一」とし、彼の「國民教育の改造」論に言及。

144 乙竹　岩造　　教育に於ける活動の原理　　倫理教育研究　　25　　昭、４、２

G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）における「活動の原理」に簡単に言及。

145 下川　履信　　ケルシェンシュタイナーを憶ふ

教育思潮研究　　３、１　　昭、４、４

G. K. の研究室への留学経験に基づいて彼の人と生活について詳しく紹介。

146 白土　千秋　　勤労教育の本質と陶冶の新體系

公民教育職業教育補習教育　　76・81　　昭、４、６・11

G. K. を「現今に於ける勤労教育の思潮を大成し、且つ其の體系を確立した者」とし、彼の「勤労教育」説の「徹底的實施」の必要性を強調。

147　　勤労の教育學的概念　　教育研究　　344 ～ 345　　昭、４、７

教育研究会主催「手工工業」協議会の開催に当たり、同協議会に寄せた G. K. の論文 Der pädagogische Begriff der Arbeit（前掲 136 の講演、のち雑誌 Erziehungsfragen in Industriegebiet, 1926

に掲載）の翻訳。

148 林　博太郎　　勤労教育の概念と其の精神化　　教育研究　345　昭、4、7

G. K. の「勤労主義」について簡単に紹介、批判。

149 伊藤　信一郎　　手工教育の基礎と使命　　教育研究　345　昭、4、7

G. K. を「勤労教育思潮」を大成、確立した「最高權威」とし、彼の勤労教育・手工教育に対する見解を紹介。

150 秋葉　馬治　　作業學校論　　児童教育　23、9　昭、4、9

G. K. の「公民教育と作業學校」論について紹介。

151 木下　一雄　　低學年の教科課程に於ける二要素

學習研究　8、11　昭、4、12

G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）における「教科課程」論と「基礎學校（Grundschule）」低学年の教科課程の実例を紹介。

152 小林　澄兄　　ケルシェンシュタイネルの最近の勞作教育思想

児童教育　23、12 & 24、1　昭、4、12 &昭、5、1

G. K. を「勞作教育思想の代表者」とし、彼の著 Theorie der Bildung（1926）における労作教育思想の大要を、その「方法的原理」を中心に詳しく紹介。

153 杉野　昌甫　　ケルシエンシユタイナー先生ミユンヘン市獨逸博物館に於ける帝國教育會視察團に對する歡迎の辭　　帝國教育　568　昭、4、12

1929年10月4日、ミュンヘン市を訪れた帝国教育視察団に対し、G. K. が行った「歡迎の辭」の翻訳。

154 小川　正行　　ケルシエンシユタイナーの第七十五回誕辰

學習研究　9、4　昭、5、4

G. K. の満75歳の誕生日に際して、親友のシュプランガーが「ドイツ放送」において行った祝賀講演 Georg Kerschensteiner zum 75.Geburtstag（のちに雑誌 Die Erziehung, 4.Jg., 1929 に収録）の要約的紹介。

155 金　容河　　第七十五回の誕生日に於けるゲオルク・ケルシェンシュタイナー

文教の朝鮮　58～59　昭、5、6～7

シュプランガーの前記祝賀講演の全訳。

156 大日本學術協會　　勞作教育思潮大觀　　教育學術界　61、4　昭、5、7

G. K. を「勞作教育の建設者であり、此の方面の第一人者」とし、随所で彼の所説に論及。特に第5章「ケルシエンシユタイナーの勞作教育説」において、彼の根本思想を詳論。

157 松月　秀雄　　喜壽を迎へたケルシェンシュタイナー教授の思出（一）（二）

教育研究　359・361　昭、5、7・8

前掲136のG. K. の講演と前掲154・155のシュプランガーの祝賀講演の内容紹介を中心にして、G. K. の人と業績について詳述。

158 水戸部　寅松　　獨逸の教育に就いて（承前）　　教育研究　361　昭、5、8

G. K. を「最も熱心なる補習教育の主張者」「權威者」とし、ミュンヘン市の「實業補習學校」の内部組織を紹介。

159 Y S 生　　學校の生活接近の問題―Die Erziehung.Mai 1930.―

教育研究　361　昭、5、8

副題の如く、G. K. が雑誌 Die Erziehung（5.Jg., 1930）に発表した論文 Das Problem der Lebensnähe

unserer Schulen の抄訳的紹介。

160 金　容河　　如何にして我々の學校を生活に近づかしむべきか？　ケルシェンシュタイナー　　文教の朝鮮　　60・63 ～ 64・66　　昭、５、８以降

前掲 159 の論文の全訳。

161 田制　佐重　　マルキシズムの教育觀（その一）

教育論叢　　24、３　　昭、５、９

G. K. を「ブルジョア・イデオロギスト」、彼の教育改革を「ブルジョアジーの教育改革」とし、彼の「職業教育論」を批判的に考察。

162 島山　利三郎　　勞作教育批判―勞作教育より勞働者教育へ―

教育論叢　　24、４　　昭、５、10

G. K. の「勞作教育」説を「ブルジヨアイデオロギーに基いて構成唱導されて居る」不充分な「勞作教育の代表説」とし、彼を「理想主義者」「獨逸帝國主義者」「獨逸ブルジヨアジーの説教師、子守、園丁」と批判。

163 北澤　種一　　作業教育と教科課程　　児童教育　　23、２　　昭、５、10

G. K. を「作業教育に於て最も妥協的讓歩的態度を以て現行教科課程といふものを認め」た者とし、彼の「作業學校」の概念を紹介。

164 野田　義夫　　勤勞作業と學習　　學習研究　　９、13　　昭、５、11

G. K. の「勤勞作業學校」論とその発展に言及。

165 龍山　義亮　　陶冶の本義と自學主義（一）（二）

學習研究　　９、13 ～ 14　　昭、５、11 ～ 12

G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）における「陶冶の構成的特質」についての所説を簡単に紹介。

166 槇山　榮次　　實際生活への連絡を主義とする教育

教育論叢　　25、１　　昭、６、１

G. K. の前掲 159・160 の論文に言及。

167 小川　正行　　訓練の根據としての習慣の養成

教育論叢　　25、１　　昭、６、１

G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）における「習慣の形式」についての見解を紹介。

168 津田　昌業　　低學年作業教育實施記録　　教育論叢　　25、２　　昭、６、２

G. K. の著 Begriff der Arbeitsschule の付録（3.Aufl., 1917 以後）Ein Organisationsbeispiel für Städtische Volksschulklassen の前半約３分の１の翻訳。

169 越川　彌榮　　ミユンヘン印象記　　小學校　　49、12 ～ 13　　昭、６、２～３

ミュンヘンの諸学校、特に Kerschensteiner-Gewerbeschule の視察の印象及び G. K. の招宴における歓迎の辞の紹介。

170 林　博太郎　　公民教育の問題　　教育思潮研究　　５、１～２　　昭、６、４

「公民教育と云へば直ちに『ケルシエンスタイナー』氏を連想する」として、彼の「公民教育」説を紹介。

171 伏見　猛彌　　ケルシエンスタイネル「生活近接の問題」

教育思潮研究　　５、１～２　　昭、６、４

G. K. の前掲 159・160 の論文の要約的紹介。

172 佐藤　熊治郎　　陶冶の意味　　教育論叢　　25、５　　昭、６、５

G. K. の「陶冶（Bildung)」の概念の定義を「主として過程の成果を觀てをるもの」とし、その定義中にある「價値感」という語は「萌芽として人間の天稟に具はる内感覚」であり、「此の内感覚が社會と其の生活内容たる文化財に覚醒されて伸びてゆくのが陶冶」であると解説。

173 龍山　義亮　　普通教育と一般的陶冶　　教育學術界　63、2　昭、6、5

G. K. を「職業教育の價値を認め、陶冶そのものの中に職業の價値を見出さんとする」思想の代表者とし、彼の思想について論評。

174 野田　義夫　　勞作教育の回顧と展望　　學校教育　217　昭、6、6

G. K. の「教育思想發達の跡を辿つて行けばやがて勞作教育思想の發達を示す事になる」として、彼の「勞作教育」思想の発展に詳しく論及。

175 松月　秀雄　　批判的人格主義と勞作教育の原理　　學校教育　217　昭、6、6

G. K. の「アルバイト」の概念について簡単に紹介。

176 石谷　辰治郎　　勞作と手工教育　　學校教育　217　昭、6、6

日本と欧州における「手工教育」の変遷について概観した後、「新しい手工教育」として G. K. の「勞作教育」に言及し、ザイデル（Robert Seidel, 1850−1930）の主張とともに、「今後の我國手工教育改善の指針とすべきもの」と指摘。

177 守内　喜一郎　　勞作の教育學的概念　　學校教育　217　昭、6、6

G. K. の全般的な「勞作教育」思想及び Begriff der Arbeitsschule（7. Aufl., 1928）と Theorie der Bildung（1926）における「勞作の教育學的概念」について紹介。

178 日田　權一　　人格と個性と文化と職業　　學校教育　217　昭、6、6

G. K. の著 Das Grundaxiom des Bildungsprozesses（1917）と Theorie der Bildung（1926）における所説を批判的に紹介。

179 田制　佐重　　ドイツ新教育運動の展望　　教育時論　1655　昭、6、6

ドイツの「新學校もしくは實驗學校」を「生活學校」「ハンブルヒ・システム」「勞作學校」の三種に分け、第三の「勞作學校」の中で「ケルシエンシユタイナー型」を取り上げ、1910 年以来の彼の「實驗學校」の基礎原理と組織について紹介、批評。

180 仁戸田　六三郎　　ケルシェン・(ママ) シュタイナーの自叙傳　　小學校　50、4　昭、6、7

G. K. の自伝 Selbstdarstellung（in:Die Pädagogik der Gegenwart in Selbstdarstellung, hrsg.von E.Hahn, I. Bd., 1926）の大要の紹介。

181 關根　忠　　教育に於ける生活の概念に就て　　教育研究　376　昭、6、8

G. K. の「職業的陶冶」論及び「勞作教育」論に言及。

182 白鳥　知雄　　ケルシエンシユタイナーの正體　　教育論叢　26、3　昭、6、9

前掲文献 62 の全文を引用し、G. K. を「偉大な戰争煽動家」「觀念論者」「反動家」と批判。

183 野田　義夫　　勞作教育概論　　文教の朝鮮　74　昭、6、10

G. K. を「勞作教育の代表者」として、彼の「勞作教育」思想について詳論。

184 小川　正行　　勞作教育論の諸問題（一）（二）　　學習研究　10、11 & 11、2　昭、6、11 &昭、7、2

G. K. の「勞作觀」について、主に Theorie der Bildung（1926）に拠りながら紹介。

185 辻　幸三郎　　作業主義の種々相と吾等　　學校教育　223　昭、6、12

G. K. をデューイとともに「社會學的見地から作業主義を主張するもの」として、彼の「作業主義」に論及。

186 三浦　喜雄　　勞作主義による教授法改善の諸方向

小學校　50、10　昭、7、1

G. K. の「勞作教育」の定義を「狭義の勞作主義」とし、彼の「自己活動」と「作業共同社會」に関する所説に論及。

187 竹井　彌七郎　　勞作學校論の發達　　小學校　50、10　昭、7、1

G. K. を「勞作學校の最大の代表」とし、彼の「公民的勞作學校論」及び「學習原論的……勞作學校論」について紹介。

188 岩瀬　六郎　　生活教育と勞作教育　　小學校　50、10　昭、7、1

G. K. の「文化哲學的勞作教育」論を教育の「一面の原理」ではなく、「全面の原理としての勞作教育の主張」と規定し、その概要を紹介、批評。

189 野田　義夫　　勞作教育と社會思想　　教育學術界　64、5　昭、7、2

G. K. が「勞作學校」思想を提唱した社会思想的背景とその反響について、ザイデルと比較しながら、論評。

190 水戸部　寅松　　歐米に於ける學校教育の轉機　　教育研究　383　昭、7、2

G. K. の「作業主義」を第一次世界大戦後のドイツの新教育の一つに数え、彼の所説を紹介。

191 川本　宇之介　　公民教育と職業指導の相關論（一）（二）

小學校　50、11 & 51、1　昭、7、2・4

「公民教育と職業指導の相關」について、G. K. の「公民教育」説を中心にして詳論。

192　　ゲオルグ（ママ）、ケルシエンシユタイネルの逝去

學習研究　11、3　昭、7、3

G. K. が1932年1月15日に逝去したことは「教育界に取つて誠に惜しいことである」として、簡単に彼の経歴を紹介。

193 佐々木　秀一　　ケルシェンスタイナー氏逝く　　教育研究　384　昭、7、3

G. K. の死を「作業教育の星落つ」として紹介。彼を「作業主義教育に依つての世界の教育革新の理論家、實際家としての第一人者」と讃え、彼の著作及びその我が国への影響に言及。

194 松月　秀雄　　ケルシエンシユタイナー逝く　　文教の朝鮮　79　昭、7、3

G. K. の業績とその日本への影響に論及するとともに、彼の訃を報じたハンブルクの新聞記事を訳出して掲載。

195 秋葉　貞二　　ケルシェンシュタイナーの逝去　　哲學研究　193　昭、7、4

G. K. を、「獨逸の現代の教育學者で彼ほど教育の實際方面に活動しこの方面に大きな影響を與へたものはあるまい」とし、彼の略歴とともに、彼の代表的な著作について詳述。

196 槇山　榮次　　作業教育の主唱者ケルシエンシユタイネル死す

學習研究　11、4　昭、7、4

G. K. を「教育の思想を単に承述し整頓したと云ふのみでなく、自ら鋤を取つて教育の畑を耕し多くの新しい種を蒔いた」「大教育家」とし、彼の略歴と思想について紹介。

197　　ケルシェンシュタイナー教授逝く

教育學研究　1、1　昭、7、4

G. K. の訃報を紹介。

198 吉田　熊次　　ケルシェンシュタイナー翁に面接せざるの記

教育思潮研究　　6、2　　昭、7、4

「現時世界の教育家中で予の最も尊敬し私淑して居たのはケルシェンシュタイナー翁であつた」とし、彼の計画になる「實業補習學校」参観の感想と彼の人柄の一端について紹介。

199 林　博太郎　　ケルシェンシュタイナー博士に就ての感想

教育思潮研究　　6、2　　昭、7、4

G. K. の人となりと功績に簡単に言及。

200 下川　履信　　ケルシェンシュタイナー先生を追憶す

教育思潮研究　　6、2　　昭、7、4

G. K. の性格と私生活について紹介。

201 松月　秀雄　　ケルシェンシュタイナー逝く

教育思潮研究　　6、2　　昭、7、4

前記 194 の新聞記事や G. K. との会見記、シュプランガーが雑誌 Die Erziehung（7.Jg., 1932）に寄せた追悼文 Georg Kerschensteiner などによって、彼の人柄と「遺産」について論評。彼の我が国に及ぼした影響にも言及。

202 大瀬　甚太郎　　ケルセンシユタイナー氏を憶ふ

教育學研究　　1、2　　昭、7、5

G. K. の教育思想と彼の「功績」について論評。

203 乙竹　岩造　　ケルシェンシュタイナー教授の教育學的業績

教育學研究　　1、2～3　　昭、7、5～6

G. K. の「統一學校説」「國家公民教育説」「勤勞學校説」「綜合的心理學」及び「文化教育學説」について詳論。

204 篠原　助市　　ケルシェンシュタイネルの教育思想

教育學研究　　1、2～3　　昭、7、5～6

G. K. の生涯と「教育の理想」「文化と陶冶」「價値と精神的作用」及び「作業學校」について詳述。

205 佐々木　秀一　　追憶と感想―ケルシエンシユタイナー氏に就いて―

教育學研究　　1、2　　昭、7、5

G. K. を「19 世紀に於けるドイツ教育の實際界に力を有した第三の人」と評し、彼の理論と人格に論及。なお、冒頭に彼との会見記。

206 倉澤　剛　　ゲオルグ (ママ)、ケルシエンシユタイネルを憶ふ

教育學術界　　65、2　　昭、7、5

前掲 201 のシュプランガーの追悼文の全訳。

207 松月　秀雄　　ケルシェンシュタイナー教授の印象

教育學術界　　65、2　　昭、7、5

各種の追悼文を紹介しながら、G. K. を「教育學界の巨星、しかも最も大地に近く輝いて實際家の行く可き道を照した……巨星」とし、彼の生涯と業績を論評。

208 野田　義夫　　ケルシェンシュタイナーの業績

教育學術界　　65、2　　昭、7、5

G. K. を「世界の大教育家」とし、特に彼の「實際教育界に於ける偉大な業績」について詳しく紹介。

209 龍山　義亮　　最近の教育思想とケルシェンシュタイナー
教育學術界　65、2　昭、7、5
「最近の獨逸の教育思想とその實際はケルシェンシュタイナーによりてリードせられたるもの」として、彼のドイツ教育界に及ぼした影響に論及。

210 島　為男　　ケルシェンシュタイナーの社會的教育理論―現代教育學者の社會的教育理論―（六）　教育學術界　65、2　昭、7、5
G. K. の「人及び彼の事業」「哲學」「公民教育」「アルバイト・シューレ」、それにデューイとの関連について詳説。

211 梅根　悟　　日本に於けるケルシェンシュタイナー輸入史
教育學術界　65、2　昭、7、5
明治40年代以降、G. K. の死に至るまでの日本における彼の「輸入」の歴史を克明に辿り、「彼の影響感化が日本教育界に珍らしくも極めて長く、そして深刻な力をもつて保持された」として、彼の「日本に對する貢献」を高く評価。

212 佐々木　秀一　　教師―德化雜論（四）　教育研究　386　昭、7、5
G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）における「教育者の心理的構造」と「教師の心理的構造」に関する所説の要点を紹介。

213 児玉　三男　　シュプランガー教授の「ケルシェンシュタイナーを憶ふ」を讀む
文教の朝鮮　81　昭、7、5
シュプランガーの前掲201及び206の追悼文の翻訳。

214 京城帝國大學教育學研究室　　ケルシェンシュタイナーと伯林の新聞
文教の朝鮮　81　昭、7、5
クラット（Fritz Klatt）がベルリンの新聞 Berliner Tageblatt の1932年1月16日付夕刊に掲載した追悼文 Georg Kerschensteiner の全訳。

215 梅根　悟　　日本に於けるケルシェンシュタイナー關係文献
教育學術界　65、2　昭、7、5
G. K. に論及した我が国における学術論文及び単行本を明治42（1909）年から昭和6（1931）年に至るまで詳細に調査し、その代表的文献の概要を付記。

216 杉浦　正一　　國際的教育者としてのケルシェンシュタイナー
教育學術界　65、3　昭、7、6
比較教育学者シュナイダー（Friedrich Schneider, 1881−1974）が雑誌 Internationale Zeitschrift für Erziehungswissenschaft（1.Jg., 1931/2）に寄せた追悼文 Georg Kerschensteiner, der internationale Pädagog の翻訳。

217 児玉　三男　　フィッシャー教授の「ケルシェンシュタイナーを憶ふ」を讀む
文教の朝鮮　81　昭、7、6
G. K. の親友フィッシァー（Aloys Fischer, 1880−1937）が雑誌 Die Arbeitsschule（46.Jg., 1932）に寄稿した追悼文 Zum Gedächtnis Georg Kerschensteiners の翻訳。

218 林　博太郎　　ケルシェンシュタイナーの公民教育論
教育思潮研究　6、3　昭、7、7
G. K. の「著しき獨創的特長」を「作業教育を通して公民教育を主唱した」点に求め、彼の「公民教育論」を紹介、批判。

219 入澤　宗壽　　ケルシエンシユタイナーの作業學校思想
教育思潮研究　　6、3　　昭、7、7

G. K. の「作業學校思想」を「大戦前に於ける作業學校論」と「戦後の著作に見る作業學校論」とに分け、発生的に叙述。

220 村上　俊亮　　ケルシエンシユタイナーの『陶冶の理論』に就いて（『陶冶の理論』に至る思想的發展と關係づけて）
教育思潮研究　　6、3　　昭、7、7

G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）に至る思想的発展の過程を辿り、かつ「著しく哲學化されたる……新しき教育學的基礎づけ」としての Theorie der Bildung を要約、紹介。

221 海後　宗臣　　ケルシエンシユタイナーの生活と教育思想の發展
教育思潮研究　　6、3　　昭、7、7

主に G. K. の自伝 Selbstdarstellung（1926）に拠りながら、彼の生活と教育思想の発展について概説。

222 野々村　運市　　遊戯論　　教育學研究　　1、5　　昭、7、8

G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）における「自己活動」の 4 形式―遊戯・競技・業務・作業―について紹介したのち、遊戯の特性を略述。

223 松月　秀雄　　文化教育學・文化哲學と現象學　現代の哲學的潮流と教育學的潮流―15―
教育學術界　　65、6　　昭、7、9

G. K. を「文化哲學的に基礎づけられた教育學」という意味での「文化教育學（Kulturpädagogik）」の主張者の一人とし、文化教育学と教育の実際的・経済的方面との関連で G. K. の「勤労学校の概念」に言及するとともに、「シュプランガーの觀たる文化教育學者としての」G. K. について紹介。

224 越川　彌榮　　ケルシェンシュタイナー教授の印象を回想しつゝ
學習研究　　11、9～10　　昭、7、9～10

G. K. を「アルバイトシューレの本尊」とし、彼との会見及び Kerschensteiner-Gewerbeschule の参観の印象を記述。

225 梅根　悟　　ケルシエンシユタイナーの作業學校論に於ける「純粋なる態度」といふ概念について　　教育學研究　　1、6　　昭、7、9

Sachliche Einstellung ないし Sachlichkeit の概念を「後年のケルシエンシユタイナーの作業學校論の中心概念」として、この概念の意味を詳論。

226 梅根　悟　　ケルシエンシユタイナーの場合、豫備的な一般的陶冶と職業的陶冶との境界何時頃であるか　　教育學研究　　1、7　　昭、7、10

G. K. の「一般的陶冶」と「職業的陶冶」に関する所説について詳論。

227 倉澤　剛　　獨逸に於ける公民教育運動の現状
公民教育　　2、11　　昭、7、11

ドイツにおける「公民教育」思想の発展を「前期」「後期」に分かち、G. K. の「公民教育論」を前期の、「職業教育と勞作思想とを基礎」とした「獨自の體系」と位置づけ、簡単に評論。

228 入澤　宗壽　　ヘッセン「ゲオルグ（ママ）・ケルシエンシユタイナーの業績に於ける革命と傳統」　　教育思潮研究　　7、1　　昭、8、1

ヘッセン（Sergius Hessen, 1887-1950）が雑誌 Die Erziehung（8.Jg., 1933）に書いた論文 Revolution und Tradition im Werke Georg Kerschensteiners の抄訳的紹介。

229 梅根　悟　　ケルシェンシュタイナーの業蹟に於ける革新性と傳統性（ヘッセン）

教育學術界　66、5　昭、8、2

上記228のヘッセンの論文の要点を綴ったもの。

230 入澤　宗壽　公民教育・職業教育及び郷土教育（上）（中）
教育學術界　66、5～6　昭、8、2～3

G. K. を20世紀初頭において「個人主義、利己主義、物質主義」に反対して「公民教育」を唱え、「公民教育の必要條件」として「職業的堪能」を説いた者とし、彼における「公民教育と職業教育の關係」に論及。

231 秋葉　貞二　ケルシェンシュタイナーの初期教育論に於ける公民教育、勞作教育、性格教育の概念　哲學研究　18、3　昭、8、3

G. K. の教育思想の発展を大きく「初期」「中期」「後期」に分け、そのうち初期（1899-1913年）における「公民教育」「勞作教育」「性格教育」の概念とその相互関係について詳論。

232 入澤　宗壽　公民教育の概念と方法　公民教育　3、6　昭、8、6

G. K. の「公民教育」論に簡単に言及。

233 小川　正行　教育の生活化問題　學習研究　12、7　昭、8、7

G. K. の「教育の生活近接問題」に関する前掲159の論文を引用、紹介。

234 井上　音松　ケルシェンシュタイナーの陶冶組織論（其の一）（其の二）（其の三）
教育學研究　2、6～8　昭、8、9～11

G. K. の遺著 Theorie der Bildungsorganisation（1933）を「円熟せる思想と終生に亘る體驗との神髄をば丹念に、系統的に盛った宝庫」としてその概要を詳述。

235 外山　卯三郎　兒童畫研究の根本的立場　學習研究　12、11　昭、8、11

G. K. の児童画研究を「兒童畫の發展階程（ママ）に關する研究……の中で最も簡単で明白な」ものとして、紹介。

236 小西　美良　國民の心性陶冶と手工教育　學習研究　12、11　昭、8、11

G. K. はデューイとともに、「手工教育は、……公民として必要な德性を體驗的に修養せしむるの特質をもつてゐるもの」と指摘したとして、彼の「手工教育」論を簡単に紹介。

237 石　三次郎　現代教育思潮（四）　教育學研究　3、2　昭、9、5

G. K. の教育学を「教育の一般的前提とその特殊機能とを結合せる無比獨創的教育學」とし、その「文化哲學的基礎づけ」について論評。

238 大日本學術協會　最新教育思潮　教育學術界秋季大特輯号　昭、9、9

第4章第2節「ケルシエンシユタイナーの勞作教育思想」、第5章第5節「ケルシエンシユタイナー公民教育思想」、第9章第4節「ケルシエンシユタイナーの文化教育思想」及び第13章第2節「國家主義教育思潮」において、彼の当該思想について概説。

239 乙竹　岩造　教育科學發達の展望（二）　教育學研究　4、5　昭、10、8

G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）を「文化教育學の急所要点が殆ど悉く消化吸収され」ているが、「教育學の科學性に關する問題」については「格別の論議が無い」と批判。

240 長尾　十三二　ホーエンドルフ　ケルシェンシュタイネルにおける公民教育および国民統一学校の概念　教育史研究　1、1　昭、30、10

旧東独、ドイツ民主共和国を代表する教育学者ホーエンドルフ（Gerd Hohendorf, 1924-1993）が雑誌 Pädagogik（9.Jg., 1954）に発表した論文 Der Begriff der staatsbürgerlichen Erziehung und der nationalen Einheitsschule bei Georg Kerschensteiner の紹介。

241 石塚　秀信　　陶冶の理論的構造　　教育学研究　22、5　昭、30、11

G. K. の著 Theorie der Bildung（1926）における「目的概念としての陶冶」の核心を成す「価値論的側面」について詳論。

242 宇野　豪　　ケルシェンシュタイナーにおける教育方法の本質

鈴峰女子短期大学研究集報　4 A　昭、32、12

G. K. の「労作学校の理念」「文化教育学的理念」及び「教師の人間的基礎」について考察。

243 大谷　光長　　教育者、教師の精神的独自性の諸問題―ケェ（ママ）ルシェンシュタイナー著「教育者の精神」を中心として―

岡山県立栄養短期大学研究紀要　2　昭、33、3

G. K. の著 Das Seele des Erziehers（7.Aufl., 1955）に拠りながら、「教育者の一般的概念」「教育者の性質」の四つの「特長」及び「教室での教師の三つの独自性」について詳説。

244 上野　武　　ケルシェンシュタイナー評価の問題１―その生けるもの―

日本教育学会大會研究発表要項　17　昭、33、5

第二次世界大戦後、東西両陣営に分割されたドイツにあって、G. K. の評価が二分されている中で、まずは彼の「生ける側面」にのみ限定して考察。

245 宇野　豪　　ケルシェンシュタイナーの労作学校論における「手の労作」について

日本教育学会中国四国支部会教育学研究紀要　3　昭、33、5

G. K. の「労作学校論」の生成過程において、「手の労作」が重視された、また重視されざるを得なかった根拠について論述。

246 大谷　光長　　性格教育の本質―人間性の回復という立場から―

岡山県立栄養短期大学研究紀要　3　昭、34、3

主に G. K. の著 Charakterbegriff und Charaktererziehung（2. Aufl., 1915）に基づき、「性格の概念」と「性格教育の本質」に論及。また、彼の所論をデューイやキルパトリック（William Heard Kilpatrick, 1871-1965）等の所論と比較検討。

247 上野　武　　ケルシェンシュタイナー教育学の背景

広島大学教育学部紀要第１部　7　昭、34、3

G. K. の教育学の全体理解のために、その「人格的背景」「社会的背景」及び「哲学的背景」について詳論。

248 宮本　仁宏　　公民教育と職業教育―ケルシェンシュタイナーを中心として―

日本教育学会中国四国支部会教育学研究紀要　4　昭、34、5

主に G. K. の著 Staatsbürgerliche Erziehung der deutschen Jugend によりながら、彼の思想における「公民教育と職業教育」との結びつきを究明。

249 大谷　光長　　教育方法論の本質―その目的論的合理性について―

岡山県立栄養短期大学研究紀要　5　昭、36、3

G. K. の「教育方法論」を「人間の形成理念を追求し、それを現実化しようとする過程に教育活動を位置づけ、その限り目的論的合理的教育方法を明らかにするアプローチ……の典型的代表」とし、その概要を紹介。

250 大谷　光長　　ケルシェンシュタイナーにおける教育活動の構造

日本教育学会中国四国支部会教育学研究紀要　6　昭、36、7

G. K. の教育目的、個性概念及び教育方法上の原理について論じ、彼の教育活動の概念の基本的

構造を解明。

251 東　日出男　　ヴァイマル憲法教育条項成立の前後（Ⅲ）
奈良女子大学文学会研究年報　　Ⅺ　　昭、38、3

1920年6月11日から6月18日まで開催された帝国学校会議（Reichsschulkonferenz）における「基礎学校（Grundschule）」問題に関するG. K. の報告の大要を紹介。

252 小林　澄兄　　ケルシェンシュタイナーのこと　　全人教育　　192　　昭、39、8

G. K. の著 Begriff der Arbeitsschule（1.Aufl., 1912 & 11. Aufl., 1955）が翻訳出版（東岸克好訳『労作学校の概念』、玉川大学出版部）されたのに際し、本書翻訳の「意味の深さ」とG. K. の生涯並びに彼の「労作教育思想」に簡単に論及。また巻末に、「ケルシェンシュタイナーの思い出」として、彼の晩年の肖像と書斎の写真、それに小原國芳（1887-1977）玉川大学学長が「ケルシェンシュタイナー学校」を視察した時の写真を掲載。

253 大浦　猛　　第二次大戦前の日本におけるディルタイ派文化教育学研究の推移―シュプランガー教育思想の研究を中心として―
教育哲学研究　　10　　昭、39、10

副題の如く、戦前の我が国におけるシュプランガー研究を中心とする論述であるが、それとの関連でG. K. の紹介にも簡単に言及。

254 中嶋　博　　北欧における労作教育学の成立過程に関する一考察―マルクス、デューイ、ケルシェンシュタイナー理論の摂取と止揚―
フィロソフィア　　48　　昭、39、12

北欧諸国（スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド）におけるG. K. の「労作教育学」の評価について紹介。

255 三枝　孝弘　　ドイツにおける教授方式改革の問題（Ⅲ）―東独における改革教育学の評価とその克服―　　岡山大学教育学部研究集録　　19　　昭、40、3

東独におけるG. K. の「労作学校思想」に対する評価と批判について紹介し、彼の思想の基調を「方法上の反知識主義」と同時に「反社会主義」的「キリスト教的ヒューマニズム」と規定。

256 和田　英武　　ケルシェンシュタイナーの性格教育論
広島大学大学院教育学研究科修士論文抄　　昭和39年度　　昭、40、5

G. K. の「性格概念」、性格形成の基盤としての「性格素質」や「個性」「性格教育」の本質について考察。

257 藤沢　法暎　　ケルシェンシュタイナーの公民教育思想の構造―とくに「国家」の問題を中心に―　　東京教育大学教育学部紀要　　12　　昭、41、3

G. K. を「世紀転換期からワイマール共和制期にかけての公民教育の指導的イデオローグ」とし、彼の「公民教育」思想の基本構造とその問題性を解明。

258 大谷　光長　　ケルシェンシュタイナーにおける公民教育思想の問題性（一）―主として制度と思想の関連を中心として―
岡山県立短期大学研究紀要　　11　　昭、42、10

G. K. の「公民教育」思想成立の「社会的歴史的背景」及び彼の公民教育思想の構造について詳述。

259 山崎　高哉　　ケルシェンシュタイナー研究―「実際教育家」ケルシェンシュタイナーの解明―　　天理大学学報　　19、3　　昭、43、1

G. K. の「全体像」構成への第一歩として、彼の長年にわたる「実際教育家」としての活動と思

想について詳論。

260 歓喜　隆司　　改革教育学運動の公民教育思想―現代ドイツ公民教育成立期の研究―
宮崎大学教育学部紀要　23　昭、43、3

G. K. を「改革教育学の公民教育の中心人物の一人」とし、彼の公民教育思想の「特徴」を簡単に考察するとともに、その「欠陥」を指摘し、批判。

261 大谷　光長　　ケルシェンシュタイナー教育学の遺産―即事態性への教育の目的―
中国四国教育学会教育学研究紀要　13　昭、43、3

G. K. 教育学の「遺産」を Sachlichkeit への教育の建設に求め、その概念の成立と発展について論述。

262 米山　弘　　ケルシェンシュタイナーの教育における個性化（Individualisierung）の概念
論叢―玉川大学文学部紀要　10　昭、44、3

「個性の完成」こそ G. K. の求めたものとし、彼の「性格教育」「公民教育」「労作学校」及び「陶冶過程」論における「個性化」の概念を究明。

263 山崎　高哉　　ケルシェンシュタイナーの補習学校改革とのその意義
日本教育学会大會研究発表要項　28　昭、44、9

G. K. を「職業学校（Berufsschule）の父」として、彼のミュンヘン市の補習学校改革の「根本原則」とその理念的、実際的・組織的意義について考察。

264 米山　弘　　ヴェーレ「ケルシェンシュタイナーの理論と実践」
教育哲学研究　17　昭、45、5

ヴェーレ（Gerhald Wehle, 1924-）による G. K. の研究書 Praxis und Theorie im Lebenswerk Georg Kerschensteiners（2.Aufl., 1964）の書評。

265 大谷　光長　　ケルシェンシュタイナー教育学の遺産（Ⅱ）―陶冶過程の不可欠の法則―
中国四国教育学会教育学研究紀要　15　昭、45、3

G. K. の「陶冶過程の基本的格率（ Grundaxiom des Bildungprozesses)」を「児童に即した教育方法の提案と相俟って、教育の自律への賛歌をうたいあげたもの」として、その「現代的意義」を評価。

266 高沼　秀正　　ドイツ新教育運動における「児童からの教育学」について
名古屋大学教育学部紀要―教育学科―　16　昭、45、3

G. K. を「労作学校」運動の代表者とし、彼の労作学校思想の基本性格に言及。

267 大谷　光長　　ケルシェンシュタイナーの公民教育思想―個人と国家との関係について―
教育学研究　37、2　昭、45、6

G. K. の「公民教育」の概念と課題、「公民教育と性格教育との関係」及び「公民的性格の特長」について詳論。

268 渡辺　光公　　ケルシェンシュタイナーにおける性格概念について―性格教育の一試み―
香川県明善短期大学研究紀要　昭和 45 年度版　昭、45、6

G. K. は「性格教育という観点から従来の性格概念の研究の上に、それを批判し教育における性格についての独自の理論を展開した」とし、彼の「個性」「性格」及び「本来の意味における性格」＝「人格」の意味と関係について考察。

269 黒沢　英典　　ケルシェンシュタイナーの陶冶過程の基本原理
日本教育学会大會研究発表要項　29　昭、45、8

G. K. の著 Das Grundaxiom des Bildungsprozesses（1917）を中心として、彼の「陶冶過程の基本原理」

について簡単に考察。

270 中野　重人　　わが国における公民科教育の史的研究（Ⅰ）―実業補習学校における公民科の成立―　　宮崎大学教育学部紀要　30　昭、46、10

G. K. を「ドイツ公民教育の理論的、実践的中核」とし、彼の「公民教育論」について概観。

271 高沼　秀正　　作業学校運動の教授理論史的検討（1）

愛知県立大学文学部論集（児童教育学科編）　24　昭、48、12

ドイツにおける「作業学校運動」の諸潮流のうち、G. K. の「作業学校」を「主として手工的原理 manuelle Grundlage に立つ」流れと分類し、彼の主張する教育方法原理の基本的性格と問題点に論及。

272 山崎　高哉　　ケルシェンシュタイナーの職業陶冶論

天理大学学報　25、4　昭、49、3

G. K. を「職業陶冶論の設立者」の一人とし、彼の主要著作によりながら、職業陶冶論を構成、その歴史的、現代的意義にも言及。

273 竹岡　幸一　　「ケルシェンシュタイナーの道徳教育論批判序説」

鹿児島大学教育学部研究紀要―人文・社会科学篇―　26　昭、50、3

G. K. の「公民教育論」「労作教育論」における「イデオロギー性」を明らかにし、彼の教育理論体系の仮説的「批判規準」を設定。

274 太田　和敬　　学校制度の統一化と多様化をめぐる問題―統一学校運動の諸理論（上）―　　東京大学教育学部紀要　17　昭、51、3

G. K. を「資本家の利益を代表する学校改革論」の代表者とし、彼の「統一学校」理論を分析、批判。

275 金子　茂　　近代教育を動かした思想と思想家（六）　統一学校論―ケルシェンシュタイナー　　月刊ホームルーム　1、6　昭、51、9

G. K. を「基礎学校の上に分化した多様な学校種を積み上げる形」の学校体系を「国民的統一学校」という名称で「はっきり打ち出した」論者とし、彼の統一学校論の問題性を指摘。

276 東岸　克好　　大谷光長著『ケルシェンシュタイナー教育学序説』

教育哲学研究　34　昭、51、10

表記の著作（法律文化社、昭和51年3月刊）の書評。

277 藤井　敏孝　　ワイマール共和国における社会化の理念―ケルシェンシュタイナーに関連して―　　富山大学教育学部紀要　25　昭、52、3

G. K. をワイマール時代の「社会化」の教育理念の代表者とし、彼の「国民教育」論や「統一学校」論に簡単に言及。

278 天野　正輝　　教育的興味概念の分析

東北大学教育学部研究年報　25　昭、52、3

近代教授理論における「興味」の「教育的意味と問題点を検討する」に当たり、ヘルバルト（Johann Friedrich Herbart, 1776 –1841）と G. K. の「教育的興味の概念」をまず考察し、ヘルバルトと G. K. の興味論の違いを明らかにするとともに、G. K. とデューイの興味論の類似と相違に論及。

279 寺沢　幸恭　　公民科と労働教授―ワイマール憲法第148条第3項についての一考察―

名古屋大学教育学部紀要―教育学科―　24　昭、53、3

G. K. を「ウィルヘルムⅡ世の公民教育の理念の継承者の代表」とし、彼の「公民教育」ないし「労働教育」説を簡単に紹介、批判。

280 北川　典子　　ケルシェンシュタイナーの陶冶論についての研究その（1）
中央学院大学論叢―一般教育―　13（1）　昭、53、11

「陶冶過程の本質を理論的に分析することによって、改革の提案の妥当性を測る『客観的尺度』なるを求めようとする」G. K. の主旨に「今日混迷するわが国における教育諸問題解決の糸口の原理が見い出されるような気がする」として、まず最初に彼の「陶冶財一般の構造」に関する所説を詳述。

281 太田　和敬　　シュプランガーの統一学校論
教育学研究　46、1　昭、54、3

G. K. を「統一学校運動の最も主要なイデオローグ」とし、彼の統一学校論とシュプランガーのそれとを比較。G. K. の理論を「激化した階級闘争と帝国主義競争に対処することを目標として、公民教育（教育目的）労働教育（教育方法）統一学校（教育制度）という三位一体的構想を打ちだし、国民的一体感を醸成するとともに、能力によるエリート選抜を行なうという、統一学校による選別の理論であった」と批判。

282 山崎　高哉　　わが国におけるケルシェンシュタイナー関係文献目録および解題（その一）　富山大学教育学部紀要―A（文科系）―　27　昭、54、3

我が国における G. K. 関係文献のうち、明治 37 年から大正末年までに刊行された雑誌類所載の論文・記事を発表順に整理し、かつその概要を付記。

283 渡辺　光公　　ガイダンスの教育学的考察―ジョーンズとケルシェンシュタイナーを中心として―　教育方法学研究　4　昭、54、3

G. K. の教育学説は「アメリカ的ガイダンスの問題点に迫まる見解を提供している」として、彼の「性格教育」と「労作の教育的意味」に関する所説を検討。

284 渡辺　光公　　ケルシェンシュタイナーにおける性格形成のための心的諸力について　香川大学教育学部研究報告―第Ⅰ部―　47　昭、54、10

G. K. が「倫理的性格の形成に重要な役割を果たす」四つの「性格構成要素」として抽出した「意志の強さ（Willensstärke）」「明晰な判断（Urteilsklarheit）」「敏感性（Feinfühlbarkeit）」及び「心情の根底からの感動性（Aufwühlbarkeit des Gemütsgrundes）」について詳述。

285 大桃　伸一　　ケルシェンシュタイナー公民教育論の特質と構造
東北大学教育学部教育行政学・学校管理・教育内容研究室研究集録　10
昭、54、12

G. K. の「公民教育論」を彼の「全理論体系の出発点」とし、また彼を「公民教育の大立者」と規定し、彼の公民教育論の本質を考察することによって、彼の公民教育は「大衆民主主義」の成立の中で「ドイツ第二帝国を維持する『最善の防塁』として構想された理論」であったと批判。

286 大武　茂樹　　ケルシェンシュタイナーの職業学校改革とドイツ第二帝政期におけるその役割―補習学校の改革を中心に―
筑波大学大学院博士課程教育学研究科教育学研究集録　3　昭、55、1

G. K. の職業学校の改革を「教育学者としてのケルシェンシュタイナーの出発点であり、一介のギムナジウム教師から 20 世紀初頭の教育改革運動のリーダーの一人へと彼を押し上げた原動力」とし、彼の改革意図を明確にするとともに、それがドイツ第二帝政期において果たした役割を考察、批判。

287 渡辺　光公　　ケルシェンシュタイナーにおける心的諸力の育成方法について

香川大学教育学部研究報告―第Ⅰ部―　48　昭、55、3

G. K. の「性格教育論」における「性格と陶冶」との相互関係、「性格教育の限界と可能性」及び「性格教育の方法」について詳しく考察。

288 大桃　伸一　G．ケルシェンシュタイナーの労作教育思想（その１）

東北大学教育学部研究年報　28　昭、55、3

ドイツの新教育運動における教育方法とその思想を明らかにする試みの一環として、「ドイツ改革教育学の一方の旗頭であるとともに、明治末から昭和の初めにかけてわが国の教育にも大きな影響を与えた」G. K. の「労作教育思想」について詳論。

289 Kiyoshi NISHIKAWA（西川喜良）　Sachlichkeit proposed by G.M.Kerschensteiner and Science of Education　甲南大学紀要理学編　24　昭、55、3

G. K. の Arbeitsschule、Arbeitsunterricht 及び Sachlichkeit に関する所説を科学教育との関連で論究。

290 高橋　勝　「ドイツ改革教育運動」研究の一視点―ケルシェンシュタイナーの学校改革論を中心に―

愛知教育大学研究報告（教育科学編）　29　昭、55、3

ドイツ「改革教育学（Reformpädagogik）」ないし「改革教育運動（Reformpädagogische Bewegung）」の「輪郭」を明らかにするとともに、「労作学校運動の理論的指導者」であった G. K. の「理科教育論」「学校改革の三つの視点」「公民教育の論理」について考察、問題点を指摘。

291 山崎　高哉　わが国におけるケルシェンシュタイナー関係文献目録および解題（その二）　富山大学教育学部紀要―A（文科系）―　28　昭、55、3

我が国における G. K. 関係文献のうち、昭和元年から昭和 54 年 10 月までに刊行された雑誌類所載の論文・記事を発表順に整理し、かつその概要を付記。

292 渡辺　光公　ケルシェンシュタイナーにおける性格形成と労作について

香川大学教育学部研究報告―第Ⅰ部―　51　昭、56、1

G. K. の主要な教育論、すなわち「職業、公民、性格、労作教育論の関係」を検討して、彼の「性格教育論において教育の究極の目標が確立された」と見なし、「性格形成に有用であり、欠くことのできない」「教育的労作の意味と構造」を究明。

293 山崎　高哉　わが国におけるケルシェンシュタイナー関係文献目録および解題（その三）　富山大学教育学部紀要―A（文科系）―　29　昭、56、3

我が国における G. K. 関係文献のうち、彼の存命中（昭和８年１月 15 日以前）に刊行された単行本・叢書・講座等を発表順に整理し、かつその概要を付記。

294 大桃　伸一　ケルシェンシュタイナーにおける性格概念と道徳的自律的人格（上）

東北大学教育学部研究年報　30　昭、57、3

G. K. にあって「性格の基底」となるものは何かを明らかにした後、個性、性格及び人格の意味内容と相互の関係について検討。

295 山崎　高哉　わが国におけるケルシェンシュタイナー関係文献目録および解題（その四）　富山大学教育学部紀要―A（文科系）―　30　昭、57、3

我が国における G. K. 関係文献のうち、彼の没後（昭和８年１月 15 日死去）から昭和 56 年 10 月までに刊行された単行本・叢書・講座等を発表順に整理し、かつその概要を付記。また、本目録連載開始以降その所在が明らかになった文献や新たに発表された文献について補遺を付す。

296 高橋　勝　教育における「作業」の理論的検討―ケルシェンシュタイナーの「作業」

観の二面性を分析して―　　教育哲学研究　45　昭、57、10

G. K. の「作業観」の形成過程、とりわけ「作業の意味づけ方の変容過程」―「自己活動」の方法としての「作業」から、「訓育」の方法としての「作業」への強調点の転換―とその論理について分析。

297 高橋　勝　　ケルシェンシュタイナーの「作業学校論」の訓育主義的性格―デューイの「作業」観との対比において―

横浜国立大学教育紀要　23　昭、58、10

「作業学校の父」と言われる G. K. が「ペスタロッチ主義者」であることは知られているが、他方、デューイからも大きな影響を受けていることが「意外に知られていない」として、G. K. のデューイへの関心と受容の視角を明らかにするとともに、デューイの「作業」観との対比において、G. K. の「作業学校論」の独自の性格、つまり「訓育主義的性格」とその問題点を詳述。

298 大桃　伸一　　ケルシェンシュタイナーにおける性格概念と道徳的自律的人格（下）

県立新潟女子短期大学研究紀要　23　昭、61、3

G. K. が「教育の究極目標」に据えた「道徳的自律的人格（sittliche autonome Persönlichkeit）」に至るために必要不可欠な「心的諸力」として挙げた「意志の強さ」「明晰な判断」「敏感性」「感動性」について詳論。

299 高橋　勝　　「作業」による学習の構造―ケルシェンシュタイナーのデューイ思想受容の視角分析を中心に―　　横浜国立大学教育紀要　23　昭、62、10

G. K. の「作業学校論」をデューイ思想の受容という観点から取り上げ、彼の「作業による学習」を「知育自体を活性化させる原理」として理解する必要性を強調。

300 山崎　高哉　　ケルシェンシュタイナー教育学の基底としての前半生（Ⅰ）

京都大学教育学部紀要　34　昭、63、3

G. K. の前半生の歩みを辿り、彼の生と教育思想との関連を検討。ここでは、彼の誕生から学生時代までの経歴を詳述し、彼の教育学がいかなる個人的な基礎体験の上に成立しているかを明らかにしている。

301 山崎　高哉　　ケルシェンシュタイナー教育学の基底としての前半生（Ⅱ）

京都大学教育学部紀要　35　平、元、3

前記 300 と同じ趣旨で、ギムナジウム教師時代の G. K. について、「教育者」と「教授者」の二面に分け、彼の教育者としての性質や活動並びに彼の教授法上の原則や創意工夫について詳論。

302 佐々木　英一　　アロイス・フィッシャーの職業陶冶・職業学校論

鹿児島大学教育学部研究紀要　教育科学編　41　平、2、3

「職業学校の父」と称される G. K. の残した課題を「職業学校の人間化（Humanisierung）」という形で解決しようとしたフィッシャーの職業陶冶・職業学校論について詳論するとともに、随所で G. K. の所説に言及。

303 山崎　高哉　　ケルシェンシュタイナーの教科課程理論（Ⅰ）

京都大学教育学部紀要　36　平、2、3

G. K. がミュンヘン市視学官（Schulrat）として最初に着手した改革活動であった国民学校高学年における「世界科（Weltkunde）」の教科課程の改訂に焦点を絞り、その改訂作業を詳しく検討するとともに、彼の「最初の教育学」になった Betrachtungen üder die Lehrplantheorie（1899）を分析。

304 山崎　高哉　　ケルシェンシュタイナーの教科課程理論（Ⅱ）

京都大学教育学部紀要　37　平、３、３

G. K. が国民学校高学年における「世界科」の教科課程を具体的にどのような目標、方法、それに教授課題をもつものとして編成したかを詳述するとともに、その資料的価値を考慮して、その全訳を付記。

305 大武　茂樹　ケルシェンシュタイナー教育思想の転換―「陶冶論」の再検討を中心に―　教育学研究　58、４　平、３、12

G. K. の「文化教育学者」への転換の意味と、その転換を理論的に特徴づけている「陶冶論」の特質を明らかにするとともに、彼の「改革教育学」的な思想基盤が「講壇教育学者」による教育の理論的研究へと変貌していく過程のもつ「思想性」を解明。

306 山崎　高哉　ケルシェンシュタイナーにおける「即物性」の概念とその教育的意義　京都大学教育学部紀要　38　平、４、３

「即物性（Sachlichkeit）」の概念は、G. K. が晩年において使い始める概念であるが、しかし、その思想の先駆形態は既に彼の学校改革活動の最初からその底流にあったことを明らかにすると同時に、彼がなぜ「即物性」の思想を強調したのか、また、そうすることによって同時代の「改革教育学運動」の中でどのような位置を占めることになったかを解明。

307 高橋　勝　近代教育学における「遊び」と「作業」の意味づけ―＜遊動＞から＜技術＞へ―　近代教育フォーラム　創刊号　平、４、10

「近代教育学」における「遊び」から「作業」へ、「作業」から「労働」へという「自己活動」の分節化と序列化について考察するに際し、G. K. の「作業教育論」を検討し、「戯れ、享受することから作る意志へ、すなわち＜遊動＞から＜技術＞へ」がその基調を成すとともに、「心身二元論のもとに構成されてきた近代的な作業観の問題点」をも指摘。

308 山崎　高哉　ケルシェンシュタイナーにおける「陶冶」概念の発展とその意義　京都大学教育学部紀要　39　平、５、３

「陶冶（Bildung）」はドイツ教育学固有の概念であるが、1960 年代以降批判の対象にされてきた。しかし、今日、それが見直されている。G. K. においては、「陶冶」概念がいかなる形で形成され、発展したのかを詳しく辿るとともに、その概念の基本的構造とそれがもつ現代的意義と限界に論及。

309 寺田　盛紀　19 世紀第４・四半世紀のドイツ補習学校―義務制学校、実業補習教育の状況―　金沢大学教育学部教科教育研究　29　平、５、７

G. K. の「理論、活動を通じて世紀転換期のドイツ補習学校の改革（義務化、職業化）をリードした」バイエルンの補習学校、実業補習学校について、その「学校編成と通学義務」並びに「授業時間・　内容」を紹介。

310 今井　康雄　「自己活動」概念と新教育―＜ヴァルター・ベンヤミンの教育思想＞研究序説―　東京学芸大学紀要第１部門教育科学　45　平、６、３

フランクフルト学派の一人ベンヤミン（Walter Bendix Schönflies Benjamin, 1892-1940）が解体した自己活動を核とする「新教育的な教育のイメージ」がドイツを中心にどのように形成されたかを考察する中で、G. K. の「自己活動の観念」に論及。

311 大谷　光長　山﨑高哉著『ケルシェンシュタイナー教育学の特質と意義』　教育哲学研究　69　平、６、５

表記の著作（玉川大学出版部、平成５年 11 月刊）の書評。

312 大武　茂樹　「ケルシェンシュタイナー教育学の特質と意義」山崎高哉
教育学研究　61、2　平、6、6

表記の著作（玉川大学出版部、平成５年 11 月刊）の書評。

313 助川　晃洋　ギムナジウム教師としてのケルシェンシュタイナーによる「教育的関係」の体現
宮崎大学教育文化学部　教育科学　16　平、17、3

G. K. を「教育的関係」と呼ぶにふさわしい「人間関係を生徒との間に実際に作り上げていたと推測され得る教師」の「典型」とし、彼の「教師論」や彼の「教育活動に見る『教育的関係』の実態」について詳論。

314 村上　美奈子　養護学校の教育における「新教育」的要素―その導入と定着過程の検証―　東京大学大学院教育学研究科紀要　48　平、21、3

養護学校のカリキュラムにおいて「新教育」的要素がどのような形で活かされ存在し続けてきたかを検証する過程で、G. K. を「労作教育運動の理論的リーダー」とし、ガウディヒとの論争において「作業学習」の道徳的側面を強調した点を批判。

315 豊泉　清浩　作業教育論の系譜について―ペスタロッチー、ケルシェンシュタイナー、デューイ―
群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編　59　平、22、2

ペスタロッチー、ケルシェンシュタイナー、デューイの「作業教育論」における「作業」の意味を検討するに際し、G. K. を「ペスタロッチーの自己活動の思想や作業教育論の影響を受け、新たな作業学校の構想を実践した」とし、彼の「作業観」や「作業の教育的意義」等について考察。

Kerschensteinerbibliographie in Japan

Takaya Yamazaki
Osaka University of Comprehensive Children Education

Rēsumē:

Die kerschensteinerbibliograhie umfaßt den in Japan gedruckten Aufsätze, Abhandlungen, Monographischen Darstellungen über Georg Kerschensteiner (1854-1932) und Bücher mit wesenlicher Bezugnahme auf sein Werk. Diese Bibliograhie ist chronologisch nach den Erscheinungsjahren der Publikationen geordnet.

Wegen Raummangels befaßt sich die hier vorliegende Bibliograhie nur mit Aufsätze und Abhandlungen über Kerschensteiner.